年長児における誇りを喚起する状況の検討

状況による誇り喚起の程度の検討

○池田 亮午¹・内山 伊知郎²

(¹同志社大学大学院心理学研究科・²同志社大学心理学部)

キーワード: 誇り, 幼児, 自己意識の感情

Study of Pride-Arousing Condition in Older Children of Preschool

Ryoma IKEDA¹, Ichiro UCHIYAMA²

(¹Graduate School of Psychology, Doshisha Univ., ²Faculty of Psychology, Doshisha Univ.)

Key Words: pride, preschooler, self-conscious emotion

目的

近年, 子どもの社会化に影響を与える機能の一つとして, 誇りや恥, 罪悪感といった自己意識の感情に関心が向けられている。誇りの経験には, 客観的自己知覚の発達に加え, 基準や規則, 目標に関する認知能力の発達が必要とされている (Lewis, 1992)。また, 誇り経験の発現時期について Stipek (1992) が, 課題達成場面では2歳ごろから, 競争場面では3歳半ごろから誇りを表出することを示している。このことから, 誇りの経験には個人の置かれている状況が関係していると考えられる。

誇りを喚起する状況に関して, 児童期を対象とした検討が行われている (石川, 2011)。しかし, 幼児期を対象とした検討は未だ見られない。本研究では, 年長児を対象に様々な状況においてどの程度誇りを喚起するか, また, 状況によって喚起する誇りの程度に違いがあるかを検討することを目的とした。

方法

実験参加者

京都市内の年長児 75 名 (男児 35 名, 女児 40 名: 平均年齢 6.08 歳, $SD=0.21$ 歳) を対象とした。

刺激例話

幼児が誇りを喚起する状況について, 年長児への聞き取り調査と, 児童が誇りを喚起する状況 (石川, 2011) を参考に, 5 つの状況カテゴリーを作成した。状況カテゴリーは, “課題または目的を達成したとき”, “注目を集める活動をしたとき”, “他者より優位な立場に立ったとき”, “向社会的行動をしたとき”, “信頼できる友人をもったこと” とし, 状況ごとに1つずつ例話と図版を作成した。例として, “課題または目的を達成したとき” は, “ご飯のときに嫌いな食べ物があったけど, 頑張って食べました。” と例話を作成した。図 1 にその例話の図版を示した。

図 1 例話図版

評価方法

例話と図版を提示し, 状況ごとにどの程度誇りを喚起するかを“自慢したくない(0点)”, “少し自慢したい(1点)”, “たくさん自慢したい(2点)”の3段階評定で回答させた。

結果

状況によって喚起する誇りの程度に違いがあるかを検討するため, 状況を独立変数, 各状況における誇り喚起の評定値を従属変数として, 一要因の分散分析を行った。その結果, 状況に有意な主効果が認められた ($F(1, 74)=5.86, p<.01$)。さらに, 多重比較の結果, “他者より優位な立場に立ったとき”

と“注目を集める活動をしたとき”, “他者より優位な立場に立ったとき”と“信頼できる友人をもったこと”において有意な差が認められ, どちらも“他者より優位な立場に立ったとき”が高かった ($ps<.01$)。各状況における誇り喚起の評定平均値を表 1 に示した。

表 1 各状況における誇り喚起の評定平均値(SD)

状況	$M(SD)$	
他者より優位な立場に立ったとき	1.61 (0.59)	* * *
向社会的行動をしたとき	1.43 (0.68)	
課題または目的を達成したとき	1.41 (0.70)	
注目を集める活動をしたとき	1.28 (0.73)	
信頼できる友人をもったこと	1.17 (0.81)	

注) **は, $p<.01$

考察

5 つの状況ごとに喚起する誇りの評定値を検討したところ, 3 段階評定でいずれの状況においても平均値は 1 点以上であった。よって, これらの状況において年長児は誇りを喚起することが示唆された。

また, 状況により喚起する誇りの程度に有意差が示されたため, 年長児では“優位な立場にたったとき”, “向社会的行動をしたとき”, “課題または目的を達成したとき”, “注目を集める活動をしたとき”, “信頼できる友人をもったこと”の順に誇りを喚起しやすいことが示唆された。向社会的行動は, 外的報酬を期待することなく, 他者に対して援助や積極的な働きかけをすることである。以上のことから, 年長児は自己と他者との比較や他者への干渉といった, 他者との関係が明瞭な場面において, 比較的誇りを喚起しやすいようである。

今回の研究では, 何歳頃からこれらの状況において誇りを喚起するようになるのかについては検討できなかった。Stipek (1992) の研究では, 課題達成場面と競争場面における誇り経験の発現時期が検討されている。これらの場面は, 本研究における“課題または目的を達成したとき”と“他者より優位な立場に立ったとき”と同様の状況である。しかし, 現在, “向社会的行動をしたとき”, “注目を集める活動をしたとき”, “信頼できる友人をもったこと”における誇り経験の発現時期について検討した研究は少ない。今後は, それらの状況について, 年長児よりも低い年齢を対象に検討することが重要であると考えられる。

引用文献

- 石川隆行 (2011). 児童が誇りを喚起する状況についての検討 聖母女学院短期大学研究紀要, 40, 26-31.
- Lewis, M. (1992). *Shame: The exposed self*. New York: Free Press.
- Stipek, D. (1992). *Self-evaluation in young children*. Monographs of the society for research in child development. Vol.57 The university of Chicago Press, 1.